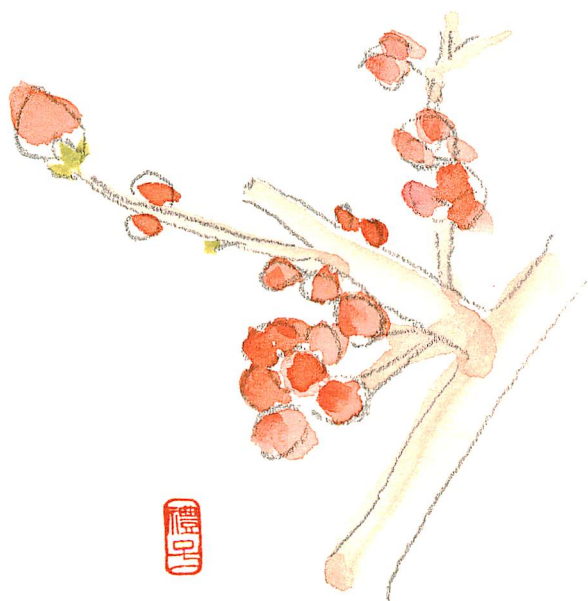


みめじみの

第50部



みめじみの

第50部



㊦

大谷光道著

目次

近くて遠い? 『正信偈』(一)	2
南無阿弥陀仏を二回	4
菩薩の決意	7
家の中から町は見えない	10
『翻訳物』	13
この世がニセモノ?	15
本当にうまくやれているか?	16
やがて焼け死ぬ!	17
流れに掉さす	20
一つの言葉、逆の意味	21
世のため人のため	23
遺弟の念力	25
寺務所からのお知らせ	27
新しい家族を	30
どうぞ、よろしく 大谷光純	31
あとがき	31

近くて遠い？ 『正信偈』（一）

わが国で最もよく唱えられているお経はと言えば、『般若心経』でしょうか。

しかし、「小さいころ、おじいちゃん、おばあちゃんと一緒に「帰命無量……、それからなんだったかな……」を唱えたことを覚えています」というのもよく聞くセリフです。わが国では浄土真宗のお宅がずいぶん多いので、この『正信偈』もポピュラーであることは間違いないでしょう。世論調査をしたわけではないので、何とも言えませんが、『般若心経』と『正信偈』とどちらがよく唱えられているか……。さあ、どちらでしょう。まあ、『正信



偈』はそれほど有名で、真宗門徒にとっては最も身近なものです。

ちなみに、浄土宗や浄土真宗など浄土教系では『般若心経』は唱えませんが、何故かと言うと、お釈迦様の教えの書かれた『お経』は無数と言っていいほど多くありますが、各宗旨では、その中で用いるお経と用いないお経、つま

り教えの中心としていただくお経とそうでないお経があるからです。唱えてはいけないのではなく、用いないだけなのです。なお、日蓮宗系でも唱えておられないと聞き及んでいます。

ただ、『正信偈』は、お釈迦様の説かれたものその

ものではないので、厳密にはお経とは言えません。お釈迦様の説かれた浄土三部経（『大無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』）等を基に、親鸞聖人がお作りになった偈、平たく言うとは漢詩で、私たちのために歌として唱えやすい形にして、親しみやすくしてくださいとあるところに、そのありがたさがあります。

そうは言っても、漢字が並んでいるせいか、『正信偈』はいつも唱えているけど、その意味がわからないから釈然としない、つまらない」と、よく耳にします。この声に應えるようなシリーズができればと、皆さんの痒いところに少しでも手が届くように心がけながら、お話を進めましょう。

南無阿弥陀仏を二回

南無阿彌陀佛

無量寿如来に帰命し、

南無不可思議光

不可思議光に南無したてまつる。

正信偈は、お勤めのリーダーとなる人が「帰命無量寿如来」と唱え、それに「南無不可思議光……」と皆が続き、最後の「唯ゆい可か信しん斯し高こう僧そう説せつ」まで全部で百二十行あります。

はじめのこの二句からお話に入りましょう。

ごく大ざっぱに言うと、この二句とも意味は同じで、「南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏」と二回唱えるようなものです。

まず南無は、南（ミナミ）や無（ナイ）という意味を表すのではなく、梵語（インドの言葉、サンスクリット語）の *Namas* に漢字を当てて南無としたものです。その *Namas* の意味を中国の言葉に訳したのが「帰命」です。

つまり、南無と帰命は全く同じ意味なのです。帰命とは、信したがじ順うこと、（阿弥陀様の）仰せに順うこと、です。

つぎに、無量寿如来も不可思議光もいずれも阿弥陀様のことなので、「帰命無量寿如来」と「南無不可思議光」は、南無阿弥陀仏を二回唱えるのと同

じだと言ったのですが、もう少しきっちりお話しすると、次のような違いがあります。

阿弥陀仏は、Amia-Budha — ameter (英語)・計ることのできない -budha — で、無量寿 (梵語：Amitayus) と無量光 (梵語：Amitabha) を兼ね備えた仏様という意味です。したがって、無量寿 (第十三願 『第三十四部』参照) の意味が前面に出ると無量寿仏、無量光 (第十二願 『第三十四部』参照) の意味が前面に出ると無量光仏ということになります。

無量寿とは、文字通り、はかり知れない命、永遠の命で、その仏様に帰命します、というのが、最初の一句です。

不可思議光は、はかり知ることのできない光明で、無量光と同じ意味です。その光明を発しておられる仏様に帰命します、というのが、次の一句です。

時間的に永遠の命をお持ちの、空間的にあらゆる世界に光明を届かせてくださっている仏様に帰命いたしますというのが、この二句です。この二句は

正信偈全体の序文に当たり、まず阿弥陀様に帰依信順のまことを表すことか
ら『正信偈』が始まります。

菩薩の決意

因位	重誓	五劫	超発	建立	国土	観見	在世	法蔵
未だ仏の覺りに至らない菩薩の地位。修行の身。	名聲聞十方	思惟之撰受	希有大弘誓	無上殊勝願	人天之善悪	諸仏浄土因	自在王仏所	菩薩因位時

法蔵菩薩因位の時、

世自在王仏の所に在して、

諸仏浄土の因、

国土人天の善悪を觀見して、

無上殊勝の願を建立し、

希有の大弘誓を超発せり。

五劫これを思惟して撰受す。

重ねて誓ふらくは、「名聲十方に聞えん」と。

観見ニ確かに見る。視線を集めて見る。

劫ニインドの時間の単位（梵語 अवन्त）。極めて長い時間のこと。四十里四方の岩を、百年に一度ずつ天女が舞い降りて来て薄い衣で撫でて、その岩が摩滅してなくなるまでの時間（他にも説がある）。

ある国の国王が国も王位も捨てて出家し、法蔵と名のられた。法蔵菩薩（後の阿弥陀様）がまだ修行中であつたころのことである。

その師匠である世自在王仏のところにおられて、

二百十億という多くの仏様の国（浄土）が出来上がる基となつた事柄と、

その国のありさまと、そこに住む人々の優れているところと、そうでないところをよく観察して、

ご自身の浄土を建設するために、この上もなく優れた願い（本願）を起こし、

類まれなる誓いを立てられた。その本願というのは、他の仏様がお出



報恩講

来にならなかつた、凡夫の私たちをご自身の世界（極楽）に迎えて、救ってやろうという願いである。

それについては、五劫というとてもなく長い間、よくよく考えてのことであった。

重ねて、「この本願を起こしたことが良い評判となつて、十方に聞こえわたるように」と誓われた。

ここは、『仏説無量寿経（大無量寿経、大経）』に説かれている内容

で、やがて阿弥陀様となられる法蔵菩薩が、その本願を起こされた部分です。
〈筆者註…法蔵菩薩が四十八の本願を起こされたこと、またその四十八願の一々についても『阿弥陀様と本願』シリーズ（『第二十九部』〈『第四十九部』〉で述べたので、詳しくはそちらをご参照ください。〉

家の中から町は見えない

このお話を初めて聞いた人は、おそらく「人間が存在したはずもない昔に起こったことであつたり、さらにその内容も空くうをつかむような物語で、とても信じられることではない」と感じるでしょう。私たちが生きている世界だけが実在する世界であつて、それ以外の世界は存在しないという立場からは、法蔵菩薩のご修行や成仏の話は、神話、お伽話、夢物語、聴くに値しない話だということになるでしょう。はたしてそうでしょうか。

私たちのごく日常のことを考えてみましょう。たとえば、今私はこの原稿

を書いています。目の前には机と紙、手にはボールペン。顔を上げれば壁、天井が見えます。しかし壁の向こうは見えません。外に出ると、道路、向かいのお宅が見えますが、その先は見えません。ところが二階に上がってみると、もっと先も見えてきます。さらに山の上にも登れば、京都の町全体が見渡せます。山の上から町が見渡せるのは、町という平面の様子を、平面から飛び出して、平面とは別の「高いところ」から見ることからです。家の一階や地面に立っていては、町の様子はわかりません。つまり平面の中に居ては、平面は見えないのです。

私たちは平面という二次元ではなく、高さ、厚みがあり、嵩かさのある三次元の世界に住んでいます。しかし、一つ下の次元である二次元の形でしか、物は見えないのです。こう言えば、「何を言うか。三次元の物が見えているではないか」と、ご注意を受けるかもしれません。確かに三次元の物は見えています。ところが、三次元の物を二次元の形にして——つまり平らなもの

して——見ているのです。私たちの目に見える映像は、絵と同じ二次元の平らな景色です。両方の目で少しずれた景色を見ることによって、頭の中で自動的に距離を測って三次元を認識しているのです。

あるいは、このようにも言えます。「平面（二次元）に描かれたものは、離れたところからは、そのすべてを同時に見ることはできませんが、嵩のある立体（三次元）は、そうはいきません。前面とせいぜい上面や側面は見えますが、後ろがどうなっているかは見えません。同時には全体は見えないのです」と。三次元の物を全部そのまま見ようと思えば、それが可能かどうかは別として、四次元の世界に入って、もちろん身体も眼も四次元のものを持つれば良いということになります。要するに、上の次元からなら下の次元の物は全部見られるのです。

また、三次元の世界を二次元で表したのが、絵や写真や立面図・平面図などの設計図面なのですが、これと同じように、四次元の世界を三次元、つま

り立体として表すことができれば、と思うのですが……。もし、四次元の世界に行くことができれば、もう一度この三次元の世界に帰ってきて、この立体を示して、四次元の世界を説明することができるのですが……。

『翻訳物』

四次元に行くのは空想です。しかしこの「次元の話」は、「法蔵菩薩から阿弥陀様へ」のお話を理解する上で大いに役立つと、私は思っています。法蔵菩薩のお話そのまま四次元や五次元のお話だというわけではありません。私たちの経験している日常の世界より高い所からの視野が存在するのだということを受け入れていくのに役立つということです。

法蔵菩薩のお話は、お釈迦様をはじめとして、心の真実の世界に通じることのできた方々が、人間の知恵を超えた高度な仏の智慧の世界をこの世界の人間にわかるように、翻訳してくださったお話なのだ、私は時々思ってい

ます。このお話がこのような成り立ち、つまり仏様の世界の『翻訳物』である
と知れば、はじめに述べた「……信じられるものではない」という見方も
変わってくることでしょう。このような視点を持つことによってはじめて、
仏様の世界に近づくことが可能になってくるのです。

「阿弥陀様が本願を起こされた一部始終を聞いて、疑う心が起こらない」
のが、「本当に聞くということである」と、親鸞聖人は教えてくださっています。

『経』に「聞もん」といふは、衆生、仏願しようきの生起本末を聞きて疑心あること
なし、これを聞といふなり

《お経（『無量寿経（大経）・下巻』）に、「聞」ということが説かれて
いるが、これは、衆生が阿弥陀様の本願が生まれてきたその根本から
隅々に至るまでを聞いて、疑う心の起こらないことである》

（『教行信証・信の巻』）

この世がニセモノ？

そうして、

世間虚仮、唯仏是真

《この世はすべて仮のものであり、仏のみが真実である》

これは、『天寿国繡帳』てんじゅこくしゅうちやう（奈良県・中宮寺蔵。国宝）に記されている聖徳太子の有名お言葉です。また、親鸞聖人のお示しが『歎異鈔・後序』にあります。

（親鸞）聖人の仰せには、「……煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもつてそらごと・たはごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておはします」とこそ仰せは候ひしか。

火宅しゃば＝煩惱が盛んで落ち着き所がないことを、火事になった家にとえた語。現世。娑婆。

《煩惱の具わった凡夫の住む火宅無常の世界は、よろづのこと何もかも、

空事・戯言であり、まことは一つもない。ただ念仏のみがまことである。》

こうなると、現実の世界と仏様の世界との重みが逆転します。

本当にうまくやれているか？

ここで、もう一度、日常を振り返ってみましょう。たとえば、新聞等で報じられる事件などを読むと、「なんで……、あんなあほなことをして……」と、他人の粗あらがよく見えてくるのですが、よくあるのではないですか。二次元の世界の中でもがいている他人を、離れた高いところから（三次元）醒さめて見るからですね。身勝手な欲望（貪欲とんよく）や怒り（瞋恚しんに）の煩惱に振り回されていることがよくわかります。自分のこととなると中々気づかないものなのに、他人のこととなると醒めて見られるのです。

また、昨日のあのことが気になったり、忘れかかっていた大切なことを思い出して胸をなで下ろしたり、他人のやることが常識外れだと腹を立てたり、

目の前に出てきたごちそうを見てうれしくなったり、……、こんなことの連続で、うれしくなったり、憂鬱ゆううつになったり、元気が出たり、落ち着かなかつたり、たまにはのんびりしたりと、まことに私たちの頭の中にはいろんなことが立て続けに去来し、それに伴って心の動き、いわゆる喜怒哀楽も時々刻々遷りうつ変わっています。良いこと、悪いこと、大切なこと、どうでもいいこと、急ぐこと急がないこと、……これらを振り分けたり、優先順位をつけたりという、頭の中の交通整理を巧みにしかも無意識に行って、私たちは毎日を過ごしています。

やがて焼け死ぬ！

こうして、まことにうまく処理しているつもりでも、それでも、仏様の目からはどうでしょうか。

先に引用した親鸞聖人のお言葉の中の「火宅」というのは、『法華経（譬ひ

諭品ゆぼん』に、

三界は安きことなく、なほ、火宅のごとし

《この世には安らかなところはなく、まるで火事になっている家のようである》

とある、有名な「火宅の比喩」のことです。「火事で燃え盛る家の中で戯れている子供たちを、お父さんが救い出そうとするのだけれども、彼らは中々聞き入れようとしない……」というたとえ話です。

燃え盛る家⇨煩惱と苦しみに満ちた三界（欲界・色界・無色界。一切衆生の活動する全世界。仏様以外の境涯。この世）

その家で遊び戯れている子供たち⇨一切衆生
父親⇨お釈迦様

このように、仏様の目からは、煩惱や苦しみのこの世にいる私たちは、燃え盛る家の中に居て、やがては焼け死ぬことも知らない

とまで映っているのです。煩惱にまみれているから、煩惱——の危険なこと

——がわからない。先の話の「二次元に居ては二次元は見えない」と併せて考えるとよくわかります。

こうして見てくると、はじめの話とはまるっきり逆になって、仏様の世界こそが真実で、私たちの日常の世界は仮のものということになってきました。本当の心の真実に根差した生活を求めていくことが大切です。このような視点でもう一度、「法蔵菩薩因位時」から「重誓名声聞十方」までを読み返してみてください。



流れに掉さす

今日は、遠方より、そしてお忙しい中を御正忌報恩講にお参りいただき、まことにありがとうございます。今回は、石川県、それと名古屋、さらに福岡と山形からの団体の方々にもお参りいただいています。昨日は、栃木のほうから団体の方々のお参りがございました。次第に、私た



渡月橋から大堰川を望む

ちの正しいお念仏の教えを喜んでくださる方々の輪が広がってまいりますこととは、たいへんうれしいことです。

九月に大きな台風があり、嵐山の渡月橋の辺りが水に浸かり、新聞やテレビで大々的に報道されました。それで、ずいぶんあちらこちらからお見舞いの電話をいただきました。せっかくお見舞いをいただきながら、こう言っているかどうかと思うのですが、ここへおいでになったらおわかりのように、ここは渡月橋に近いのは近いのですが、場所がだいぶん高いので、川の水に浸かるといのはちよつと考えられません。しかし何も起こりえない所というのは世の中にはあり得ないので、もしあるとすれば、後ろの山が崩れるとかでしようか。

一つの言葉、逆の意味

水に浸かった渡月橋で思い出します。お講（毎月二十八日にここで開いて

いる聞法の会)の方々と、大谷楽苑(昨日ここで歌ってもらったコーラス)の人たちと合同でレクリエーションに出かけようと、予てから、嵐山の屋形船に乗る計画があり、先日、行ってきました。余談ながら、渡月橋は桂川に懸っていると思っている方が多いのですが、実は渡月橋を境に川の名前が変わります。渡月橋の上流は大堰川^{わおいがわ}、下流が桂川というのが正確です。この屋形船の出る所は、上流側にある有名な高級料亭「吉兆」の前あたりなので、大堰川ということになります。

私もここへ来て八年になりますが、あの屋形船に乗ったのは初めてです。久しぶりにゆつくりさせてもらいました。言うまでもなく、あの舟はエンジンで動いたり、またボートのようにオールで漕ぐのでもなく、竹の棹^{さお}で川底を押し舟を操るのです。深い所に行くとは棹が川底に届かない、そういうことになるので、熟練した船頭さんじゃないと舟は操れないわけです。

その光景を見ていて、「流れに掉さす」という言葉の解釈について、何か

の本に書いてあったのを思い出しました。「流れに掉さす」の意味は、「流れに逆らって舟を動かす」のか、「流れに従って舟を動かす」のか。これについて、実は間違った解釈をしている人のほうが多いのだそうです。私も間違ったほうの解釈をしていましたが、皆さん、どちらが正しいと思われるか。正しくは、流れに掉さすというのは、流れに逆らって舟を動かすのではなくて、流れに従って棹をさして、流れの方向に舟を動かすという意味なのです。これは「時代の波に乗る」「物事が順調にはかどる」という意味を持っているのです。

世のため人のため

私共の本願寺が宗祖親鸞聖人から今日まで何百年の道のりを歩んで来た、その中で、いわゆる正しい意味での流れに掉をさすことができた時期、間違った意味での流れに掉をささざるを得なかった時期、その両方があったのだ

と、船頭さんの巧みな棹さばきを見ながら、ひとりぼんやり考えていました。

親鸞聖人のご生涯、中でも流罪に遭われたこと、覚如上人が本願寺の正統を唱えて本願寺がさびさびとしていったこと、蓮如上人から教如上人までの一向一揆、現如上人の北海道開拓（明治維新によって東（本願寺）は徳川家による庇護ひごを失うが、開拓が社会貢献となる）など、思い起こされます。これらは、視点によっては必ずしも「時流に逆行」したものとは言えませんが、これらのご苦労は、後に必ず花開く時が訪れています。

私が言うのは僭越せんえつですが、たとえば、蓮如上人の本願寺中興は、覚如上人以後の地道な積み重ねなくしてはあり得なかったことだし、現如上人の北海道開拓があったからこそ、その後の東が存在し得たと言えます。

わかりきったことですが、たとえば、現如上人の北海道開拓と言っても、上人ひとりがあのだ大な土地を開拓されたのではなく、特に北陸方面のご門徒、すなわち皆さんのご先祖と一緒に北海道に渡って成し遂げられた大事業

なのです。皆さんのご先祖の方々がお念仏の教えを喜び、お念仏の喜びを絶やさないように、つまり、後の者たちにお念仏の喜びを伝えるべく、必死になつて守り続けて下さつた結果なのです。お念仏の教えを守つていくということは、一人ひとりが教えを聞いて実践していくことはもちろんですが、この北海道開拓の例でも言えるように、世のため人のためになる事業を皆で力を合わせて成し遂げることも、まことに大切なことです。ひいてはそれによつて、宗門という形での活動が可能となり、お念仏を後の世に伝えていく礎となつていくからです。

遺弟の念力

まさにいま念仏修行の要義まちまちなりといへども、他力真宗の興行はすなはち今師（親鸞）の知識より起り、専修正行の繁昌はまた遺弟ゆいていの念力より成ず。

《浄土の教えも、その要とするところは宗旨（浄土宗、浄土真宗など）によってまちまちであるが、他力真宗が盛んであることは、親鸞聖人の教導によるものであり、自力を離れてただ念仏をする浄土真宗の繁昌は、また聖人の遺されたお弟子方の強い思いから湧いてくる力によって成し遂げられるのである》（覚如上人『報恩講式（私記）』より）

これは、ただいまの日中勤行で、私が登高座をして拝読した、三段からなる『報恩講式（私記）』の初段の最後の部分です。

親鸞聖人のお弟子方と同じように、八百年の間、その時代、その時代の人たちの「念力」があつてこそ、今日の私たちがいるのです。私たちも、将来の子孫のために、お念仏の喜びを残して参りましょう。

寺務所からのお知らせ

平成二十六年 春の法要『闡如會』勤修

四月十日から十三日まで

【法要時間】 逮夜・14時、晨朝・7時、日中・10時30分

十日 14時 釈尊・親鸞聖人御誕生会

十一日 7時 立教開宗記念日法要

10時30分 酬徳會

十一日逮夜より十二日日中 達如上人百五十回忌

十二日逮夜より十三日日中 前住闡如上人御祥月命日

(十二日逮夜は大谷楽苑の演奏に引続き勤行)

【おかみそりのご案内】

毎逮夜後(十三日のみ日中後)に帰敬式(おかみそり)を行いますので、有縁の皆様とお誘い合わせの上、御参加下さい(要予約)。

闡如會記念

春の宝物展『本願寺に伝わる御宸翰―天皇の墨跡―』

同時展示『大谷家の雛人形』

日本の伝統仏教は皇室とともに長い歴史を歩んできました。東本願寺も例外ではありません。黎明期から東西分立を経て現代に至るまで、皇室とのご縁を大切にしながら宗門を護持発展させてきたのです。

本年は、そんな皇室と本願寺とのつながりを今に伝える御宸翰ごしんかん（天皇の御真筆）やゆかりの絵画を公開致します。【拝観料無料】

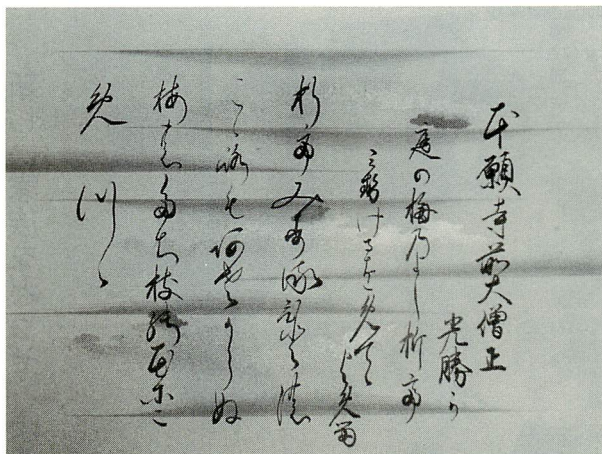
4月3日～13日、午前10時30分～午後4時30分（13日は午後2時まで）

※闡如會の11日、12日、13日は晨朝勤行御参詣の皆様限り、早朝開場致します。

《展示予定・本堂1F・通期》

孝明天皇『紅梅御製』、伝亀山天皇『和歌二首』、

後陽成天皇『源氏物語奥書』、新清和院御遺物『伊勢物語絵巻』他



孝明天皇御宸翰『紅梅御製』



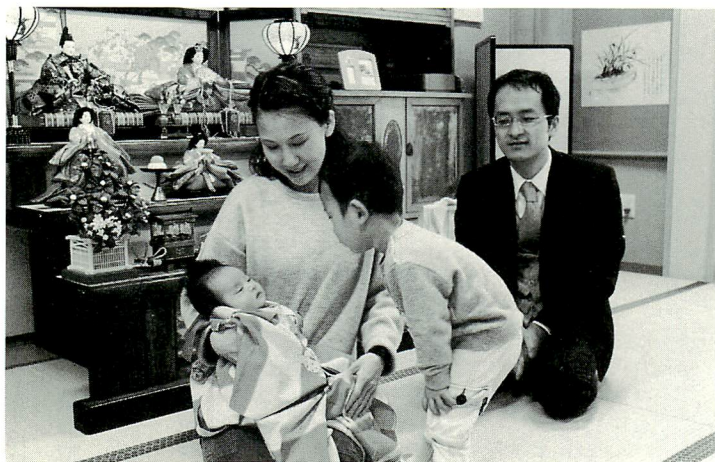
新清和院御遺物『伊勢物語絵巻』

《特別公開予定・本堂地階・10日より13日まで》 ※法要毎座終了後のみご案内いたします。

孝明天皇『龜山天皇御尊号』、公海僧正画『東照宮神像（徳川家康公像）』、
作者不詳『藤原鎌足公・定慧和上・淡海公三座真影（多武峯曼荼羅）』他

新しい家族をどうぞ、よろしく

大谷光純



一月三十日に第二子を出産しました。
女の子で名前は沙智（さち）です。

間もなく二つになる長男の寛人は興味津々といった様子で小さな妹を見ています。毎日、瞬く間に時間が過ぎていきます。すが、あたたかな気持ちに包まれています。

この子たちが大きくなった時に、どんな本願寺になっているだろうか？ 大勢の方のお念仏が響く御堂。子どもも大人も集う場所。そんな本願寺にしてゆきたいと思います。

どうぞ今後ともよろしく願います。

あとがき

みめぐみの刊行委員会

今回から新しいシリーズ「近くて遠い? 『正信偈』」が始まりました。真宗で一番ポピュラーな『正信偈』（親鸞聖人作）を光道台下は、それこそ「痒いところに手が届く」解説をして下さいます。導入に当たり「四次元から三次元を見るような…」と、仏教的世界観を斬新な切り口でご説明されます。

また、後編では、日常の出来事に「世のため人のため」に御歴代が如何に苦心され、またそれを門徒が伝えてきたか。光道台下は法主として、真宗では敬遠されがちな「念力」という言葉をあえて用い「子孫のために、お念仏の喜びを残して参りましょう。」と呼びかけられます。そのお心にお応えしていきますように。

光純新門様がお二人目を出産されました。お役目、育児にお忙しい中、お写真を寄せて頂き、有り難うございました。

バックナンバー、追加注文の頒布価格、送料は次の通りです。

『みめぐみの』1冊の価格は200円（税込）です。

○1冊～4冊 = 送料及び振替手数料（70円）はご負担下さい

※送料 1冊=120円、2冊=160円、3冊=180円、4冊=210円

○5冊～9冊 = 送料は実費、振替手数料は不要です

※送料 5～6冊=210円、7～9冊=290円

○10冊以上 = 送料・振替手数料共に不要です

以上の要領で申し込みを受け付けます。折り込みハガキにご住所、氏名、電話番号をご記入下さい。ハガキに切手は不要です（ご住所には郵便番号をお忘れなく）。

みめぐみの 第50部

2014年3月5日 印刷

2014年3月10日 発行

定価 200円

著 者 大谷光道

発 行 みめぐみの刊行委員会

〒616-8432

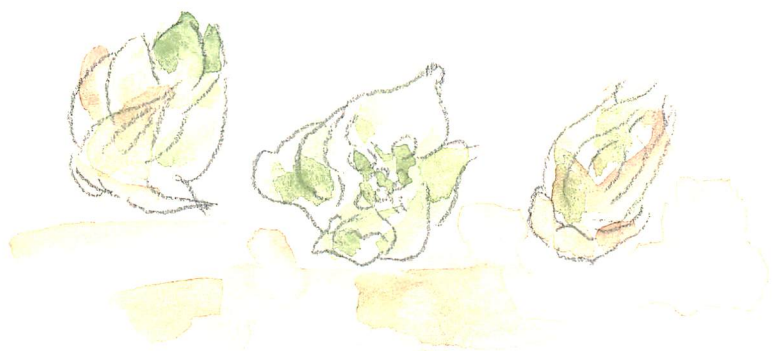
京都市右京区嵯峨鳥居本北代町21

本願寺寺務所内

TEL.075(882)6262 FAX.075(882)6220

振替口座 01060-5-56990

印 刷 (株)中外日報社



みめぐみの刊行委員会刊